経済同友

4

April 2012
No.744

Contents

■特集1
東日本大震災 追悼シンポジウム 02

■特集2
第6回　教育フォーラム 11
勉強するのは何のため？
働くってどういうこと？

■特集3
2012年度 事業計画・委員会委員長等一覧 16

■Close-up提言
教育問題委員会　提言 19
北山 禎介 委員長
大学改革が進まない要因は
ガバナンスの機能不全にある
今こそ意思決定システムの改革を

国家情報基盤改革委員会　提言 21
金丸 恭文 委員長
「電子政府構想」の
無残な失敗を繰り返すな！
国益にかなった番号制度システムの実現を

■Seminar
第1188回　会員セミナー 23
里見 進 氏
（東北大学病院長　※現・東北大学総長）
「東日本大震災
地域医療の再構築と被災地の復興」

■Column
巻頭言　稲野 和利 01
「『自己責任』と『安心』」

リレートーク　片野坂 真哉 24
「東日本大震災追悼シンポジウムに参加して」

私の思い出写真館　木村 惠司 26
「小学校の教壇に立って」

新入会員紹介 25

今月の表紙：世界の文様シリーズ

【イギリス／ヴィクトリア王朝期の建築装飾】

バラと複数の文様を混在させ、優雅さや気品を極めています。この時代はイギリスの美術にとっても黄金期で、とても華やかな装飾が特徴です。

巻頭言

副代表幹事
経済成長戦略委員会 委員長
稲野 和利
野村アセットマネジメント
取締役会議長

「自己責任」と「安心」

「自己責任」「リスク」という言葉が多用されながら、投資の意義が強調されていたのは、1997年の金融ビッグバンから2000年代前半にかけてのことであった。そして、この「自己責任」や「リスク」という言葉に関して言えば、逆に、そのような言葉を多用するだけでは「投資」は根付かないということをわれわれは経験してきた。

作家の村上龍氏は、「自己責任」という言葉を「概念が希薄な言葉」と表現し、「言葉の概念を社会が共有していないときに、そのような言葉を多用した啓発が果たして可能なのだろうか」(日本経済新聞「経済教室」2001.1.8) という問題提起をしている。正鵠（せいこく）を射た指摘であったと、今あらためて思う。

一方、昨今ではあらゆるところで「安全」「安心」という言葉が多用されている。投資、特に個人の投資という世界と関連しても、「安心」という言葉が多用されている。「安全」には定義があり基準を設定し得るが、「安心」は主観である以上、基準はない。「安心」とは「社会的不確実性が存在しないことに関する認知」と定義されるそうである。

投資に関して「安心」という言葉が使われる場合、文脈的には、「善良なる投資家が構造的に欺かれることなく投資できる環境」を形容するために使用されているわけだが、「安心」という言葉があまりにも高い頻度で使用されると、「投資」という行為自体に結果としての「安心」を求めているようなイメージになってしまうので、こういった言葉の多用は危険であろうと思う。

投資とは未来に向かって何かを投じる営みであり、大多数の場合、その何かとはお金である。そして、未来に何かを投じるということは不確実性と同居した行動でもある。そのような世界において、予定調和的安心は存在しない。

「安心」「安全」「自己責任」「リスク」といった言葉の使い方は難しい。

だが、金融サービスの世界における「自己責任」や「リスク」という言葉の理解が進むための材料を積極的に提供し続けるのが金融サービスを担う側の役割であると私は考える。そして、われわれ金融サービス業界に生きるものにおいて求められるのは、「自己責任」という言葉を便法として使わないという職業態度なのではないだろうか。